

啄木人生日記

石川正雄編著

507

現代教養文庫

社会思想社刊

編著者略歴

1900年函館市に生る

石川啄木の遺児京子と結婚，石川姓を継ぐ

《著者》 啄木のうた(社会思想社)外

《現住所》 東京都世田谷区代沢2の27の4号

現代教養文庫 507 啄木人生日記

© 1965

昭和 40 年 2 月 15 日 初版第 1 刷発行



編著者	石川正雄
発行者	土屋実
本文印刷	株式会社文弘社
カラー印刷	横山印刷株式会社
製本	横田製本株式会社

発行所 株式会社 社会思想社
東京都千代田区神田駿河台3-5
電話代表 (201) 2067~8・9646
振替 東京 71812

担当 田中隆人

落丁乱丁は直接小社にお送り
下さればお取替えいたします

現代教養文庫の定価はすべて
カバーに明記してあります

現代教養文庫

507

啄木人生日記

石川正雄 編著

社会思想社刊

啄木人生日記

目
次

はしがき

六

若き悶え……………一〇

敗惨！療養の床に……………一七

あこがれの詩人……………二三

夢と現実……………二六

破局……………三六

漂泊……………四八

運命の大火……………五五

浪々流転……………六〇

さいはての町にて……………六三

虚無……………七七

脱出……………八四

打ちつづく苦惱……………九二

東京に入る……………九八

生！死！……………一〇七

泣かず笑わざる心	一一五
盲動!	一二五
三階の哲学者	一三四
転機の苦悩	一四〇
新しい生活!	一四六
疲れ	一五三
生活とのたたかい	一六三
新しい年	一六九
社会主義に	一七六
人民の中へ	一八八
病床にて	二〇一

はしがき

ある人の調べによると、啄木の伝記に類する著書は七十以上あるそうで、私も三十冊位は目を通したが、千篇一律、何れも生活の表面だけを描き、通俗的ドラマチックに、悲劇の詩人とされているだけで、時代環境の中における人間の複雑微妙な感情や、人生詩人、先駆的詩人といわれる、その思想の動きなどに深くふれているものはあまりなく、結局外側だけをぐるぐる廻っているだけの感があり、私には何かもの足りなさを感じさせます。

啄木の悲劇はそんな生活の表面だけにあったのではなく、悲劇の真の根はもっと深いところにあったように思います。かれは自らの生活をかえりみて、文学者川上眉山の死について、こういっています。

一昨晩剃刀で自殺した川上眉山氏の事について考えた。近來の最も深刻な悲劇である。知らず知らず時代に残されてゆく創作家の末路、それを自覚した幻滅の悲哀！ ああ、その悲痛と生活の迫害と、その二つが此詩人的であった小説家眉山を殺したのだ。自ら剃刀をとって喉をきる、何といういたましいことであろう。創作することにならずさわっている人にとっては、よそごととは思えない。

啄木はいつも時代と環境の事で、人生をたたかいとろうとした。そして矛盾だらけな明治資本主義日本、かつ民衆に閉塞された時代に、たたかいをいどみ、刀尽き矢折れてたおれた、そこに

詩人啄木の真の悲劇の根があったと思うのです。かれの作品はその中で生まれたもので、そこには複雑微妙な人間のたましいがとらえられています。啄木の詩歌を味わうには、それを知っておきたいものです。

そこでそれを知る手がかりのひとつとして、かれがその人生をいかに生きようとしたか！ それをかれ自身に語らせたのが、この「啄木人生日記」です。もちろんこれだけでは充分とはいえず、かれの生きた時代背景、生活環境にわたらなければなりません。この小冊子ではそのゆとりなく、今はかれ自身の語りだけに止めましたが、それでもこれを手がかりに、かれの真実をくみとることができれば幸いです。そしてそれによってかれの作品——その詩歌がより深く味わわれるのではないかと思うものです。

石川正雄

やはらかに積れる雪に
熱^はてる頬^はを埋むるとき
恋してみたし

啄木人生日記

若き悶え

師も友も知らで責めにき

謎に似る

わが学業のおこたりの素^{もと}

装^まゐては

その香による

蝶^ての羽

秋^{あき}は融^とれの

笛^{ふえ}に々々——た。

日誌「秋韻笛語」より

*青春の情熱！そして若き悶え！そこに夢多いのちが描かれる。石川啄木の詩は、単にその詩才だけでなく、この若き悶えからの人生追求の中にはじまった。かれが人生というものに思いをはせたのは、中学四、五年のころからであった。もとよりそれは、きわめてロマンチックなものではあったが、かれはそれを人生に対する疑問煩悶^{はんもん}からという。そうして心の遍歴——それはまた生活につながっている——がはじまった。

煩悶とは？ 其当時、教科書を買ったり、湯屋へ行く金を節したりして、秘かに買った或種^{あるあ}の書籍——先生からは禁ぜられた旨^うい旨^うい木の實と——自分の心中に起っ

た或新事件（註、そのころの恋愛によるはげしい情熱）とによって、臍氣に瞥見した「人生」という不可測の殿堂の^{おもかげ}倂と、現在自分の修めて居る学科、通って居る学校との間には何の關係もないらしいという感じであった。アダムでなくとも禁制の木の実は誰しも手を出したい者、予は此漠然たる感じに刺激されて、日に／＼「人生」の殿堂を夢想し始めた。人生を夢想する事は、當時の予にあつては直ちに一の煩悶であつた。予は一書を読み了る毎に、人生の「美」と「嚴肅」とに就いて、必ず何等かの知識を得た。予の好奇心は益々高まる。そして又、予の心中に起つた新事件は日に／＼芽を出し葉をのばして、人生の奇しき色彩と生命の妙なる響きとを語つた。予の不安は、予をして一瞬の安逸をも貪らしめなかつた。予は其頃、大抵夜は二時三時まで薄暗き燈下の下に、読み或は沈思した。予は此為め、其後一年許りも菓餌に親まねばならぬ程の不健康の素を作つたのである。然し頭を冷まそうと外へ出る。上を仰げば満天の星！その星の間断なき瞬きも、予のためには何か宇宙の大秘密を囁き合つて居るかの様に見えた。予は此煩悶のため毫厘もの楽しみも学校なるものに認むる事が出来なかつた。（林中書）

* ときは明治三十年代、そのころ青年間に人生に対する懷疑的傾向が濃厚で、第一高等学校生徒藤村操が「人生不可解」という有名な巖頭の感を書きのこし、華嚴の滝に投身自殺したのが、明治三十六年で、中学生だった啄木が、人生に對し疑問煩悶を抱いたというのにも、この時代的背景が考えられよう。

かれは明治三十五年の秋、盛岡中学五年で卒業を目前に、学校を中途退学した。それには

日頃の不勉強から、一学期学科試験に、仲間をかたつてカンニングしたのが発覚し、きびしい譴責処分をうけたことへの反撥や、家庭の事情などからまっていたが、その反面、かれなりの人生に対する疑問煩悶という、若々しいロマンチックな夢が根にあったからだろう。それからまもなく、そのころの心境であらう

血に染めし歌をわが世のなごりにてさすらひここに野に叫ぶ秋

という一首が、はじめて新詩社の雑誌『明星』にとりあげられて世に出るや、詩人の世界を夢みて、放たれた小鳥のように上京した。

愁ひある少年の眼に羨みき、

小鳥の飛ぶを

飛びてうたふを

秋詠

運命の神は常に天外より落ち来って人生の進路を左右す。我もこ度其無辺際の際に乗りて自らが記し行く鋼鉄板上の伝記の上に一展開を示せり。

惟^{たゞ}うに人の人として価あるは其宇宙的存在の価値を自覚するに帰因す。人類天賦の使命はかの諸実在則の範に屈従し又は自ら造れる社会のために左右せらるるが如き盲目的薄弱の者に非ず。

宜しく自己の信念に精進して大宇宙に合躰すべく心靈の十分なる発露を遂ぐべき也。運命は蓋し天が与えて以て吾人の精進に資する一活機たるのみ。されば余輩は喜んでその翼に鞭うって人生の高調に自己の理想を建設せんとする者也。

呱呱の声をあげてより十有七年、父母の膝下を辞して杜陵に学ぶこと八星霜。前途未だ漠として浮雲に入る。この秋流転の水流に従って校を辞し友とわかれ双親とはなれ故山を去りて恋う子の美しき面影とさえわかれて孤影飄然東都に出づ。嗟乎、何人かよく遊子胸奥の天絃に知音たる者ぞ。

秋詠笛録はこの旅出の日より起したる日誌也。

裂かば花に、碎かば琴の夢追ふ子追ふて旅する命の秋よ。

天琴に誰かよき音の幸守らむ秋掩ふ雲にわかれて去ぬる。

明治三十五年秋

白蘋詩堂（白蘋は当時の号）

十一月一日

——うつつなの思いにのみ百四十里をすぐして午前十時上野駅に下車し雨中の都大路を俾走らせて十一時頃小石川なる細越夏村兄の宿に轅下させぬ。

談つきずして夜遅くまで眠らず、出京第一夜の夢はここに結びたり。

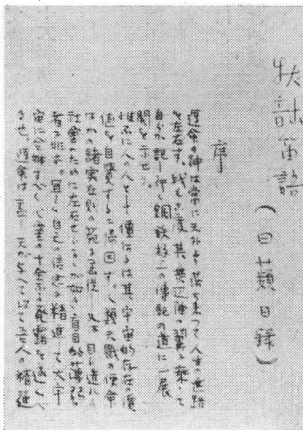
市に入りて名なきすぐせをはづべしや花の高きぞ風つよき者



右 上京記念に当時函館在住の義兄夫妻に送った
写真と裏面の署名

下 右、旅日記「秋龍笛語」の昌頭

左、出発前日友人岡山残紅との記念写真、座
せるが啄木で上京の姿。



* ふくらむ夢に胸かき鳴らし、出京すると早速社友に名をつらねている新詩社の集会に出席したり、与謝野鉄幹晶子夫妻を自宅に訪ねて、この著名な詩人夫妻の文芸談に耳を傾けたりして、早くも夢の一端に立つ思いだった。鉄幹はその時三十歳、詩壇一方の雄として、青年達あこがれの的だっただけに、田舎出の少年啄木には大きな感激だったろう。

だが草深い田舎寺で、生活の苦ひとつ知らず、坊ちゃん育ちの少年啄木が、何ら経済上の保証のない、無鉄砲ともいえる出京で、夢で東京生活が成り立つ筈はなく、所持金がなくなると早速生活に困り、数少ない所持品を売ったり、在京友人に厄介をかけたり、年を越す頃はもう動きがとれなかった。後日書いたそのころの回想と思われる「構牛死後」という、感想断片には、次のように書かれている。

私が十八の歳——神田錦町のとある通りに、二階建の入口の格子だけが真新しい、薄汚ない安下宿があった。入口に掲げた止宿人の人名札は大抵裏返しになっていて、名前の出てるのは四枚か五枚——その数少ない止宿人の中に、京橋辺の或鉱業会社の分析課に勤める佐山某という人がいた。小石川の先の下宿を着のみ着のまま逐出された私は、東京へ出て三月も経たぬ頃ではあり、年端も行かぬ身空で経験もなければ知慧もなし、行処に塞がってしまつて、二三日市中を彷徨き巡った揚句、真壁六郎という同年輩の少年と共に、その人の室に二十日許りも置いて貰った事がある。

恰度一月中旬から二月上旬にかけての寒い盛り、其間に一度大雪が降つて、市中の電車の不通